昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和二十八年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通巻第五十四号）

慈光

第五卷　第九號

目次

近角常音先生に別れまつりて……花田正夫…（1）
大無量壽経講話……福島政雄…（5）
自然法爾章講話跋……白杵祖山…（11）

近角常音先生に別れまつりて

花田正夫

昨年末、求道学舎の記念日の当時から、御身体の違和のままで、越年せられ、一月二十五日の日曜講話を最後に、初春遂に先生は脳軟化症といふ非常に六難しい御病氣になられたのであります。爾来半歳にわたり、おてあつい御看護と、医学の粋をあつめられての御療養の甲斐もなく、七旬に餘る御生涯を、昭和二十八年八月六日、御やすらかに、念佛の息絶え終られたのであります。

八月八日、御葬儀の日は、常観先生と共に生涯の御活動の本拠でましました求道会館で、いとも厳粛に、いともしめやかに、告別の式が執り行はれたことでありませう。私自身、痼疾、走せ参じ得ぬ身、僅かに佛前を清めて、終日几坐、遙かに想ひを東天に走せまゐらせつつ、静かにおとむらひ申上げたことでありました。

会者定離　かねてありとは知りながら
昨日　今日　とは　思はざりしに

この愛別の歌は、北陸流謫の地で、祖聖が、法然上人の死を聞かれた時の御詠と伝へられて居ります。今回はしみじみとわが身にかけて御歌の心の無限の涙に触れることであります。

追慕のままに

顧みますのに、私が先生の御教化を直接被り始めましたのは、昭和十六年の九月の中頃でありました。京都で池山先生が逝かれ、私も引き続き肺浸潤で臥床、二年半の静養の後に、求道会館をお訪ひ申したのであります。

其時、常観先生は痛痛しいまでに衰へ給うた病軀を扶けられながら、やうやく講壇に進まれ、歎異抄の第四章、慈悲に聖道、浄土のかはりめあり、のところを御引用になりまして、人間の親切の末通らぬこと、そこをかねてしろし召して満ち足らはせて下さるのが彌陀の本願であり、念佛であると説いて下され、更に先生の親友で社会事業に志された方があつたが、名利の念の断ち難く伏くし難きに崩折れて、如何にも真実の善は不可能であると行き詰つた末に、歎異抄の第二章、親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしのところをフト思ひ浮べ、爾来念佛三昧の生涯を終つた人があると述べて下さつて「しかれば念佛申すのみぞ、末通りたる大慈悲心にて候」と結ばれたのでありましだ。

引き続いて、会館の應接室で特に私を接見して下され「君が来てゐたので、池山君の話を想ひ出して話したよ。わたしは懺悔録や其の他で何時も発表して居るやうに、よくなりたい、よくしようの一方で進んだが、遂に微塵もよくなれない、相対虚仮の善、雑毒の善しか出来ぬ身であると知らされ、大煩悶に落ちた時、ふと大空を仰いだ時、広大無辺な佛のおまことに心ひらけて、それから、それひとつで今日までやらせて貰ひました」と御自身の御体験を全身微笑の姿でサラサラと簡結にお話し下さつたのちに「私は身体が悪いので十分に話が出来ないから、あとは弟に聞いてくれるやうに」と言ひ殘されて、奥様に扶けられながら、学舎の方に帰られました。

爾来私は常音先生に直々の御育てを蒙るやうになりましたが、常観先生は、その年の十二月二日、大平洋戦争開始の直前に、国を憂ひ、宗教を案ぜられながら、念佛無碍の一道を御身にかけて信嘗されつつ、おだやかに念佛の生涯を終られたのでありました。

昭和十七、八年と戦争の様相は段々ときびしくなりましたが、大阪で田川、蜷川、大字様などの御尽力で隔月の法話会が常音先生中心に開かれましたので、私共は途中下車を御願ひ申して七、八回まで名古屋で先生の法雨に浴することが出来ました。ことに和服姿しか存じませぬ私が、戦禍きびしい頃国民服を召して居られた先生を駅でお迎へ申して戸惑ひしたことがありました。

敗戦となりまして名古屋も大阪も焼野原となり、私は年一度は東都に先生をおたづね申し、或は滋賀県虎姫近くの御自坊に伺ひ、種々と御慈育を賜はつて居りました。私が閉戸不出の痼疾者となりますと、先生御夫妻で御見舞をいただき、其節名号をも起毫して頂き、今は先生の絶筆として有難く頂いて居ります。

我慢のやまぬのが可哀想である

先生とお別れ申した今、私の耳の底に深く刻まれて、私

の生涯を貫いて味ひ続けさせて頂くひとつが「我慢のやまぬのが可哀相」の先生の常のお言葉であります。

経典の初めに必ず如是我聞と阿難尊者の聞と信を証しして下さつて居りますが、常音先生が、二十年の聞法求道の御生活で、聞きあてて下さつた聖句がこの一語でありました。同時に私共に先生が何度か繰り返して御述べ下され、いくらお説き下さつても説きづくせない、さういふ趣のある聖句であります。

さて常観先生は二十九歳の御時、信の眼がひらかれまして以来、東京中心に非常な活動を始められたのでありますが、常音先生も東京に出られ、お兄弟で異体同心の御活動をして下きれたのであります。然し始めの二十年間常音先生は聞きに聞き、聞きに聞き抜かれたのでありました。

始めの頃は私共と同様に「兄は信仰を獲て大いに活動してゐる。自分はやくざ者であるが、信を獲て、それからしつかりやらう」といふ風な、信心を利用して、自分がしつかりしようといふお考へもあつたと承りますが、信心とはさう云ふことではない、信心を得ても得なくとも三尺の蛇は何時までも三尺の蛇で、長くも短くもなれるものではない、といふ風に誤りを知られたさうであります。

其後、時には非常な歓び心もおこり、今度こそはと喜んで居られたが、それも一、二ケ月で消えて了ふ。さういふことも数回繰り返されたのでありました。のちには言葉も無くなつて常観先生と談合しあはれるといふこともなくなり、常観先生も常音先生に特別に説かれるといふことも無かつたのでありました。

斯うした年月が次から次へと過ぎ去つて、「日曜講語の日は聞かぬわけにもいかないが、どうせ聞いたところで解るものではない」と心に決めて、会館の片隅で聞法を続けられた由であります。

さうなされてゐるうちに、自分はいくら聞いても信心は獲られない、一生やくざの、出来そこなひで終るより道はない。淋しいことではあるがやむを得ぬことである。ただ然し、このどうしても信心の頂けぬ自分であるから、頂けなくても、頂いた人と同様に、へだてなく兄が扱うてくれさへすればそれで満足である、とかう云ふことを考へられたさうであります。「このことを打ち明けて話せばよかつたのに、自分は兄に対して信心のある人をよくして、信心のない者は疎んじられるといふ偏見を持つて居りました。さうでない、さういふことにおへだてのないお慈悲であるので、自分が勝手に向ふをへだてゐたのでした」

とつおいつ、あれを思ひ、これを思うてゐられるうちに

とうとう二十年の歳月は夢と過ぎ、形ばかりの聴聞を続けて居られました或日のこと、常観先生が「弟は我慢の強い奴で、その我慢のやまぬのが可哀相であると何回となく繰り返されてゐる」と人づてに聞かれたのでありました。

その時常音先生は「兄貴はひどいことを言ふ。自分は信心がない。兄貴は立派な信心でやらせて貰うてゐるのだから自分は兄貴の言ふ通りに萬事従うてゐる、兄貴に対しては従順にしてゐる、すこしも我慢を出してゐない、それなのに我慢が強いとはあまりに酷な言ひ方であると、一寸は腹まで立ちましたが、まてまて、すべて物の値打は買手がつけるので、自分がどんなに従順にしてゐる積りでも、兄貴が我慢がやまぬ奴と見てゐる以上は致し方がない、自分で自分は解らぬのだからそれはそれとしておかう。さてそれ程我慢のやまぬ奴であれば、出て行け、別居しよう、わ1の手では仕方がないといふのが世間の常で、それ以外はないのに、我慢がやまぬのが可愛相だと思つて、度々繰り返して愚痴となつて人にまで告げてゐるとは、やくざな自分の我慢のやまぬ身を可愛相と常に心にかけてくれてゐたとは、これは有難いことである。その心がそのまま祖師の御心であり、釈尊の本懐であり、そのままが彌陀佛の大悲であり、本願でましました、と、ヘナヘナと佛様のふところにコロゲ込みました。それから一週間も経ちました頃、兄貴が私を呼びまして、何か有難いことでもあつたのか、最近いかにも嬉しさうぢやがと問はれましたので、実はかうかうであると話すと非常に兄が喜んでくれ、それからは講話の前席をすこしづつ始めるやうにと申しました。実のところ何度も信心がひらけたと兄貴をだましてゐたので、今度は何も言はずに居りましたら、兄貴の方から氣着いてくれたやうでありました」

先生の御法話を一度でも御聞きなさつた方は、以上のことを必ず御聞き下さつてゐられると思ひます。「我慢の強いことをこちらが氣付かぬ、否ほんたうに我慢が強いから我慢が強いとさへ氣付き得ない者を、向ふが見抜いて、しかもそこが可哀相であると大悲を無限に注いで下さる方がましますこと」そのことひとつを繰り返しまき返し御身にかけてお知らせ頂いたのであります。これがそのまま彌陀大悲の至極でありまして、全く言語に絶するものであります。

「我慢のやまぬのが可哀想とのお慈悲である」ここひとつに無尽の宝蔵が圓融無碍されて居るのであります。先生が御一生かけて説き尽くされることの出来なかつたものであり、現に宝林壇上よりのらし続けて下さる実語でありませう。

以下次号

大無量壽經講話

―四十八願に就いて―

福島政雄

今日は大經について第三回目のお話をさせて頂きます。今日から四十八願に入るのでありますが、私自身と致しましては、四十八願について成る程と、すこし感じ始めましたのが、今から十二年程前からで、それまで、その味が一向に解りませんでしたが、滿州の新京で、青年の有志者達にお話しましたのが御縁となりまして、成る程と感じ始めました。然し感じ始めただけで、其後十余年も經つてゐますが、いまだに四十八願が解つたとは申せません、ただ肝腎のところは成る程と感じますが、四十八願の一つ一つがさうだとは申せません。

さて第一に「願」といふことでありますが、以前に金子先生のお話を聞きました時、先生は、願といふのは、とうていさうなりさうにも思へないのに、それなのに願はずにゐられないものであると言はれました。そう云ふ風に聞きますと、やむにやまれぬ心といふものが願でありませう。どうなつて行くと、はつきり自分に見當がついてしまつてゐるのではないが、我が心に願はずにゐられない、それが願といふ心持であると承つて居ります。

四十八願とは、やむにやまれぬ心を四十八に分けて述べられてあるので、四十八と云ふ數に特別の意味があるのではありません。大經の異訳本が五通り程ありまして、その中には二十四願になつてゐるのもあります。四十八の願の數にこだはることはいりませんが、兎に角やむにやまれぬ心を四十八通りに述べられたのであります。

前にも申しましたと思ひますが、阿彌陀佛と釈尊との心の間係はどうかと申しますと、親鸞聖人が「釈迦彌陀は慈悲の父母」、釈迦と彌陀は、お父さん、お母さんのやうであると御和讃に讃仰せられて居ります。私といたしましては、大經は釈尊が御自身を産み出れた母胎と申しますか、自分を産み出されたお母さんとでも言ふべきものを述べられたお経と思ひます。即ち、大經は釈尊が慈悲と智慧にすつかり包まれて、釈尊が自ら帰命して居られる姿を説かれたものであると思ひます。さう云ふことでありますから、四十八願は釈尊御自身が広大無辺の母胎ともいふべき慈悲と智慧につつまれて一如になり、その母胎のひびきを釈尊がお聞きになつてゐる、それが四十八願として、ここに現れてゐる、かう云ふ感じを私としては持つて居ります。つまり母親の生命の種々のひびき、それを中心として種々様々のひびきを聞いてゐられる、それを私共がおがみますと、光顔巍々、ひかりかがやくお姿になつてゐられるのであります。釈尊自身の御氣持としては非常にやはらげられた御氣持、絶対の慈悲と智慧に帰命して、頭を下げておいでになる、さう云ふところに、私は釈尊への親しみを無限に感じます。

扨て四十八願のひびきでありますが、最初に第一、第二、第三と云ふ順に、願の心持を一口二口で極く簡単に申し述べまして、一應四十八願を尋ね、次に改めて、聖人が何処を中心としてゐられるかをお話し、最後にそれを私がどう感じてゐるかと云ふ順序で申しませう。

第一の願は、法藏比丘が打ち建てられる淨土の世界には、地獄、餓鬼、畜生などの不幸な者の居ないやうにしたいといふ願で「無三悪趣の願」と云はれて居ります。

第二の願は、一度その淨土に生れたものは再び三悪道にあともどりしたり、沈んでしまふといふやうなことは決してないものにしたいと云ふ願で「不更悪趣の願」であります。

つまり第一第二の願は貪欲や瞋恚や愚痴の中に沈む心配のない世界を打ち建てたいといふことであります。

第三の願は、そこに生れたものは、黄金色に輝くやうにさせたい、つまり黄金の光といふのは、私共に非常に尊い感じを持たせるものであります。黄色でもさうでありますが黄金色は一種の尊さを感ぜしめる光であります。淨土に生れたものは生命の底に黄金の光といふやうな尊いものを持つ、さう云ふ風にさせたいといふ願であります。かう云ふことは私共の心が純粹になると多少わかります。これを「悉皆金色の願」と云はれて居ります。

第四の願は、そこに生れたものは皆平等な氣高い姿で、美しいとか醜いとかいふ差別の無い姿にならせたいといふ願であります。私共は何時も美醜にとらへられて居りますが、心が純粹になりますと、美醜を超越した世界を求めるものであります。美醜がわからなくなるのではありませ

ん、美は美、醜は醜と知り抜いてゐて、それをこへるのであります。これを「無有好醜の願」と呼ばれて居ります。

第五の願は、そこに生れたものは、自分の過去世の有様、その前生、更にその前の生まですつかり解らせるやうにしたいと云ふ願であります。前生とは今の現実の心の動きを深く見、深く感ずるときに感ぜられるものであります。迷信的に、自分の前生が犬であつたとか猿であつたとか言ふことではありません。これが「宿命通の願」であります。

第六の願は「天眼通の願」であります。私共は普通にあまり遠い処は見えませんが、それが見える神通力であります。これは科学的に考へてもわかることでありますが、さうではなく、私共は自分のもつた表面の感覚に障へられて深い処が見えませんが、この通力を得ると感覚をとほして奥深いものが一目にわかるやうになるので、これは真の修行を積んだ人々に段々見えて来る世界であります。

第七の願は「天耳通の願」であります。これは遠く離れた沢山の佛様の説法を聞くことが出来るやうにしたいといふ願であります。

私共は眞に聞くべきことを聞かないで、いらぬことばかりが聞えるのでありますが、この通力により、種々の雑音や声をとほして、眞に聞くべきものを聞き得る耳がひらけるのであります。

第八は「他心通の願」であります。他人がどんなことを考へてゐるかすぐ解るやうにさせたいと云ふ願であります。私共は仲々解りませんが、心の純粋な人はそれがわかるのであります。私自身のことを申して変なことですが、私の一人の子が、私が何にも云はぬのに私の心が解つてゐるとしばしば感ずることがあります。私が書齊の或本を問題として居りますと、その本を引き出して居ります。その子は病氣でありますが、心が純粋になつてゐて父親の心が解る様であります、心が純になれば人の心が解る、私共でも純になれば解るのであります。

第九は「神足通の願」であります。これは一瞬の間にどんな遠い処でも行けるやうにしたいといふ願であります。これも科学的に説明して飛行機で飛ぶといふことも云へますが、さうでなくして、一瞬の間に何処までも自分の心が通じて行くことであります。さうですから宿命通といふことが時間的に心が無碍になることであれば、神足通とは空間的に心が無碍に働くことであります。

第十の願は、我々の迷の根本が我執でありますから、我執を決して起さないやうにしたいと云ふ願であります。

「漏尽通の願」でありまして六神通の最後の有難いところであります。我執を超越させたいといふ願であります。

第十一の願は、その国に往生する者は、この娑婆世界に住むうちに、その国にきつと生れるに相違ない位に入らせたい、そして必ず佛のさとりにまでみちびくと云ふ願で「必至滅度の願」と味ばれて居ります。

第十二は「光明無量の願」であります。光明無量といふのは、空間的に絶対の智慧の光、智慧の働きが無限である、さういふ風になりたいと云ふ願であります。これは法藏比丘御自身がさうなりたいと云ふ願であります。

第十三は「寿命無量の願」であります。これは時間的に無限でありまして、前の十二願は智慧で、これは慈悲であります。慈悲の働きが無限に及ぶといふ生命を我身の上に持ちたいと法藏比丘が自ら願はれてゐるのであります。

第十四の願でありますが、その浄土では教を聞いて行く人々が沢山あつて數へ尽すことが出来ぬといふ浄土でありたいといふことであります。私共の教育界の言葉で申しますと、限りない教育教化の行はれる国土を建設したい、さう云ふことになりますと思ひます。この願を「声聞無量の願」と申します。声聞とは声を聞いて忠実にその教を行ふ人であります。

第十五の願では、その国に生れる者も寿命が限りないものにならせたい、但し衆生済度のためにはその寿命の長短は自在であらしめたいと誓はれて居ります。寿命とは慈悲でありますから、その国の衆生も慈悲の無限の人にしたいと願はれて居ります、これを「眷属長寿の願」と云はれます。

第十六の願は、その国では悪いことと云ふものは名前も聞かない、不善の名を聞かざる国土を建設したい、悪いことといふものは名もない、善にみちた国土でありたいといふことで「無諸不善の願」と呼ばれて居ります。

第十七願は「諸佛称揚の願」であります。十方世界の無數の佛たちが皆法藏の名をたたへ、功徳をほめて下さるといふ風にありたいとあります。これは意味が深いので後で申し上げませう。

第十八願は、この四十八願の中心で「至心信楽の願」と云はれて居ります。如何なる人々も、阿彌陀佛の御名をほんたうに信じて、往生を疑はないから、よろこびのあまり一遍でも十遍でも、佛の御名を称へる者は必ず淨土に生れる者であらせたい。但し五逆の罪、親を殺し聖者を殺すといふやうな重い罪や、正しいみ法をそしると言ふ罪を犯したものは除くとあります。この願は最も大切なものでありますから、あとで申し上げませう。

第十九願は、佛になりたいと云ふ心を発して種々の修行する人々が、心をまことにして、まことの修行した功徳によつて淨土に生れたいと願ふ者があれば、その人のこの世の生命の終る時に迎へに行かうと云ふ願で「至心発願の願」と申されます。これもあとで詳しく申上げませう。

第二十の願は、名号を称へ、心を誠にして、その名号を称へたことを自分の功徳だと心得て、その功徳をふり向けて淨土に生れたいと願ふものは、おしまいには淨土に生れるやうにしたいと云ふ願で「至心廻向の願」と云はれて居ります。これも大切な願でありますから後に申しませう。

第二十一の願は、その国に生れる者は三十二通りのあらゆるまことの相好がととのふやうにあらせたいといふ願で「具足諸相の願」と云はれて居ります。

第二十二願は、その国に生れる者はすぐ佛のさとりと等しい菩薩としての一番上の位にさせたい。但しその人の願で衆生済度の願を建て、煩悩の世界に帰つて普賢の働きをしたい者には娑婆世界に帰れるやうに自由自在にさせたいと云ふ願で、これを「還相廻向の願」と呼ばれて居ります。これも大切な願であとから申し上げませう。

第二十三は、その国に生れた者には神通力を持たせて、わづかの時間にどの国の佛のもとにも行けて、諸佛を供養出来るやうにしたいとの願で「供養諸佛の願」と云はれて居ります、これもすこしわかる感じがいたします。

第二十四は「供具如意の願」と云はれてゐるもので、諸佛に供養する時は、何でもさしあげることが出来るやうに供養の道具を自由に得させると云ふ願であります。

第二十五は、その国に生れる者は一切智を得て佛のやうに説法出来るやうにしたいといふ「説法如意の願」であります。一切智とは佛の智であります。成程佛は一切をしろしめすと云はれますが、眞宗の信心の上からは、一切を聞いて受け入れて行くといふことになれば、一切智といふ

とであります。私共は狭い心でありますが、これを打ち開いて、一切を聞くとなると一切智を我が身にもらふことになりませう。

第二十六は「那羅延身の願」であります。その国に生れた者は非常に力強い堅固な、丈夫な身体を得る、さう云ふ身体をもたせたいといふのがこの願の心持であります。これを読みますと私共がよく病氣になつて苦しみますが、病氣になり勝な私共が、大力堅固の身体を頂くといふ問題は考へさせられるのであります。それも一切智と同じで、自分では現実には身体が弱く苦しむといふことでありますが佛陀の慈悲と智慧を我身にうけて来ますと、この病苦の中にありながら何とも言へない落着をえてくる、さうすると娑婆世界にありながら身体のどうだ、かうだを超越するやうになる、つまり大力堅固の身体をうけたと同じやうなことになる。これは私共が現に味ふことであり、私も多少経験します。

第二十七は「所須厳淨の願」であります。その国に生れた人々の持つてゐる道具が立派な、比類のないものばかりでどんな天眼通の者も數へきれぬ宝を持たせたいとあります。これはよく解りませんが、おそらく心の宝といふことでせう。天眼通の人でも心の宝を數へきれぬ程のゆたかな人にならせたいと云ふことでせう。

第二十八は「見道樹の願」であります。これは眞直にその国に生れたのでなく、廻り道をして来る人でも、佛がさとりをひらかれた時、その上を覆うたさとりの樹を見ることが出来るやうにしたいといふことであります。これは佛の成道のさとりの心を遙かに感じて、結局そこに一筋に来て佛知見を開くやうにあらせたいといふ願であります。

第二十九は「得弁才智の願」であります。その国に生れた者は、それを衆生に説き聞かすに自在な弁才があるやうにしたい、それはただおしやべりになると云ふことではない、真実の御信心の人の一言を聞くと身にこたへまして非常な働きを私の身に持つやうになります。一言でも無限の力をもつ、四無碍弁とはそんなのでありませう。

以下次号

自然法爾章講話跋

臼杵祖山

自照の悪人凡夫

祖師聖人の御物語りをあつめてある口伝鈔の一章に、三経の判釈を述べられてあります。

「いはゆる三経の説時をいふに、大無量寿経は法の真実なるところをあらはして、対機はみな権機なり。観無量寿経は機の真実なるところをあらはせり、これすなはち実機なり。いはゆる五障の女人章提をもて対機として、とほく末世の女人悪人にひとしむるなり。小阿彌陀経は、さきの機法の真実をあらはす二経を合説して、不可以少善根福徳因縁得生彼国とらとける無上大利の名願を、一日七日の執持名号にむすびとどめて、ここを証誠する諸佛の実語を顕説せり。」

この文によれば大経は法の真実、観経は機の真実、阿彌陀経は機と法の二つを合説したものであると明してあります。此の中に大経には如何なる法が説いてあるかといふに、要するに悪人凡夫の助かる法であります、さればその対機は悪人凡夫であるべき理であります、然るに大経に現れて居る大衆は、一人として悪人凡夫なくして、普賢・文珠・彌勒を上首として十六正士の善人聖者ばかりが挙げられてあります。

このお方々は私達のやうに、朝から晩まで、三毒三垢を生活の元素として居ない、それらの全く尽しはてて無くなられたお方であります。重ねて申しますが悪人凡夫の助かる法を説き顕はした経典に、悪人凡夫が一人も居ないで、その反対に善人聖者ばかりの集りであることは、全く説聴の法則にそむくといふことになります、説かれる法が、聴かるる機に同一徹底しなければ、たすかることは出來ないはずであります。それに説かれた法は悪人凡夫の助かる法であるのに、悪人凡夫は一人も居なくて、善人聖者の集りであるのは、如何なることか腑におちないことであります。私達も青年時代からそれが不審で度々師匠に尋ねたこともありますが、その後段々と経文を熟読するにつけて、

それがおぼろげながらにも、自照され、道味されて、自分ひそかに喜んで居ります。

今ここに悪人といふことは、私達が考へて居たやうなことではありません、それは他から符牒をつけられて悪人といはれるやうなものでもない。

私達の実際は、自分の腹底には、常に善人であるやうに思うて居ります。自分は正義である、真実の道を進んでるのであると考へ、自分の方に道理をつけて、善人顔して、常に腹には俗悪非道のたくらみに日夜をあけくれして、善人顔の悪根性でをります。悪根性の極悪をいだきながら、何の自照も、自覚もない、全く無願の悪人であります。

然るに今言ふところの悪人とは、全く他から名ける悪人といふ符牒でなく、自ら照らした生命の流露であります。それは真実に道を求めずには居られない淵源であります。今の普賢・文珠・彌勒等の自照の心地に於ては、実に言語道断の悪人であつて、私達のやうな表面を糊塗した善人は一人も居らなかつたのであります。地獄には堕ちてはならぬ、極楽に参らねばならぬ、地獄には堕ちたくない、極楽には参りたい、地獄に堕ちないやうに、極楽には参らるるやうにと、如何にも身勝手な心から、五年、十年、何十年、尊い月日を無駄に費して來たことを思ふと、私達は他力の眞証を得るには、あまりに善人すぎ、賢者すぎ、極言すれば、ずるすぎる。

彌勒菩薩などは、地獄も極楽も、それをどうするかといふ分別意識を持たないほど極まれる愚者であり凡夫であり、そこで本願の眞意、悪人往生の本源に唯の一度で、教へのままに聞くままに、二度と問ひ返しすることもなければ、疑ふべき余地を持たないのであります。

「教の如く奉行して、敢へて疑ふこと非ず」との彌勒菩薩の信嘗がいたく仰崇されます。極重悪人、他の方便なく、唯念佛を称へて西方に至ると聞かれたままが受け入れられたのであります。

堕ちてはならぬ。参らねばならぬ、堕ちたくない参りたい、堕ちないやうに、参らるるやうに、などの願生意業の乞食根性の善人氣取りの尽き果てたる全無我の境地、恢廓広大の超勝独妙の破夫荒の信嘗であります。

善導大師が「三悪の火抗は足の下にあり」とある。この足の下とは、私の心の中を示したのであります。日夜不断の生活の一歩一歩の下に、又は心念意識の心々相続のままが、私一人の一大事をみつみて行くところに、それを見つめれば見つめる程、それが切実なれば切実なるほど、深い内省をもち照鑒の眼を自分の内面に向けたすがたが、大無

獲

?

量寿経の真実であります。そこで悪人往生の本願を説かれながら、悪人が一人も居らないで善人聖者の集りであつた、その善人聖者の内省照鑒の眼を以て信嘗された自分は、全く極悪最下の凡夫であつたといふことに道味されます。

すべて求道の人は、みな自分の得られないことを憂ひとし、また失はれたことを悔いつつ進んでゐる、そこに言ひ現はすことの出來ない余音嫋々として流れて尽きないやうな「道を求めて止まず」といふ道味があります。この心持を天親菩薩が、獲の字について「未得今獲」と「已失今獲」といふ言葉に示されたのであります。言葉は簡単でありますが道味は津々として尽きないものがあります。今祖師聖人がその道味を信嘗遊ばされたことは、如何に底深く尽し得られないことであります、それを更に興へて今の私達の新らしき信嘗として聖人から教へられ、私一人の喜びとして居ります。

永遠の求道

私達の習癖として、教へられたり聞かされたりした文句や言葉を、そのままおぼえて、それで信仰を得た、助かつて居るのであると思ひ込んで居る。それは全く生命のない死文句を金科玉條と心得て居るに過ぎないのであります。ただ文句にかかはり言葉に囚はれるまでにして、自分の五臓六腑にしみこむとでも云ふやうな真味のないことであります。

真実に道を求めて辿り行く相は、どこどこまでも辿りつき得ない道を、永遠に求むる心が尊いのであります。

孟子が「人以て恥づること無かるべからず、恥づることなきをこれ恥づれば、恥づることなし」と云はれて居ります。自分は無恥の徒であることを恥と知れば、それは恥づべきことなき立派な人であるといふことであります。この無恥の徒であることを自照するところに、その人の道を求めて止まれない進路が見出されるのであります。

祖師聖人が

「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、真証の証に近くことをたのしまず、恥づべし、傷むべし」

「無慚無愧のこの身にて、まことのこころはなけれども」

と仰せられた、この喜ばず、快しまず、無慚無愧、なけれども、そこに聖人の深遠高明なる求道の進路が伺はれる、若しもこれに反して、喜んで居る、快しんでゐる、慚愧することもなく、まことのこころはある、と云ふ態度は、決して道を求むるものの心象ではありません。

孔子聖人が

「人一たびにして之を能くすれば、己れこれを百たびす。人十たびにして之を能くすれば、己れこれを千たびす。」

と仰せられてある。この意味は、自分は学といふ学を学び得ざるものであるといふ自分の不学に自照されたるときに、学はずには居られないことになる、それがやがて問ふこと、思ふこと、弁まへること、行ふこと、すべてが止むに止まれぬものがある。そこで人が一度で学び得るとしても、自分は十たび百たび千たびと、如何に度を重ねてもと云ふ精進は、学び得ずと云ふもの、言葉をかへれば、愚かなものであると云ふ意味であります。それに反して私達はいよいよ怠性を発揮して、人が十返することを一返で得ようとし、人の百返もかかることを十位でかたづけようとするほどに賢者ぶり智者ぶつて居るのであります、孔子聖人などの言行を思ふに、門弟子などに対しては、斯くせねばならぬ、斯くすべしなど教へられますが、しかし一度孔子が孔子自身を見られた場合は、常に未だ得ざる自分を見、己に失うた自分を見て、さうして自分は得られない自分であり、失ひ通しの自分であることを歎いて居られます。

「默してこれを識し、学んで厭はず、人を誨へて倦まず、何れにかわれ有る哉」

「徳、これ修めず。学、これならはず、義をきいてうつること能はず、不善改むること能はず、是れわが憂へなり」

門弟子に向つては、徳を修めよ、学をならへよと教へながら、自分に向つてはどうもそれが出来ないと云ふ憂へを抱き

「過つては則ち改むるに憚かること勿れ。義を見てなさざるは勇なきなり」

などと教へながら、自分は、義をきいてうつる能はず、不善改むること能はず、と憂愁をいだき、しかも、

「これをいかにせん、これをいかにせんといはざるものは、われこれを如何ともすること能はず」

ドウショウカ、ドウショウカと云ふことを繰り返して憂へて居られます。実に孔子は得られないことを悲しみ、また失ひ通しであることを憂ひつつ、独り静かに自照の下に、凝視をおこたられないところに意味深い、そうして最もゆかしい生活であります。

然るに私達は得もせぬことを、如何にも得たり顔して、如何にも得意然として生活をして居ります、思ふにこの生活全体が虚偽であり、偽善であります。

蓮如上人が

「心得たと思ふは心得ぬなり。心得ぬと思ふはこころえたるなり」

と似て非なる信者（私を）をきびしく誡められてあります。

編集後記

かねて御療養中の近角先生が遂に御遷化されましたことは、誠に何ものにも遊がたい悲しみであります。早速、岐阜県の能戸得一様、九州の有田和夫、吉田延世様、島根県の三瓶徳英師、愛知県の竹内鎧川様、松山の飯塚さだ女史から迫悼の書面を頂き、相共に御いたみ申上げた次第であります。

大無量寿経にサラサウ樹のもとに佛陀が八十年の御教化を終へ給うて、御弟子に護られ鳥獣、草木まで減おしまれつつ入涅槃せられたことを極り無しと説かれ、一度を示現して繁昌せる御日程は、九月廿四日が七七日。東京を済すこれと共は、何時でも廿五日午前八時頃の急行で、滋賀県東浅心の暗く鈍い私へ倒の見に井郡朝日村字延勝寺の西源寺に五時過ぎあるこれ聞ける、何時で遺へ転減が、御到着、廿六日本葬、廿七日に埋骨、廿九日朝出発せられて京都大谷に納骨せられます。御由であります。

○

太陽の光線が七色に輝やき、ダイヤの玉が千変萬化の彩光を放つ如く聞きまつる実語金言をとほして無量無辺の信嘗をこれから頂きたいことであります。

仰ぎ願はくば宝林壇上より哀愍の御手を垂れ、とこしへに攝護の光明におさめ給はらんことを、重ねて念じ奉ることであります。

○

近角常音先生の御本葬、埋骨、納骨の

△大経の講話はいよ／＼四十八願をお述べ下さいました。今回は略述下されました前半の下さいました。次回は五願の眞実三願の転入などが、大切な問題に信味を注決し先生が願身のひつの下なつて御の味常生の文字れて講義を返照須

△自然法爾章の御講話から抜き書きさせて頂きましたが、常御育てを被りまして頂き、御聞かせを信味は御信葉をだけたゞ襟を正して拝読申すばかりであります。

○

慈光 第五巻 第九号 昭和二十八年九月十五日 発行（毎月一回十五日発行）

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

昭和二十八年九月十日印刷
昭和二十八年九月十五日・発行
毎月一回十五日発行

定価 一部 十七円（郵税共）
半年 百円（郵税共）
一年分 二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 富田陸
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所 慈光社
道会館
振替口座 名古屋一〇四七〇番

良書照会

こころ 福島政雄先生著
発行所 東京都港區芝白金三光町三〇八
歓喜書房
頒価 一五〇円 送料 十六円